

島崎静子編

藤村妻への手紙

—— 静子よりの手紙を添えて ——

岩波書店

藤村 妻への手紙

昭和四十三年七月二十日 第一刷発行 ©

定価五百円

編 者 島 崎 静 子

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 株式会社 岩 波 書 店
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

精興社印刷・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

大正十二年		一
大正十三年		八
大正十四年		八五
大正十五年		一五〇
昭和二年		一八九
昭和三年		二〇六
昭和十三年		二三七
昭和十四年		二三九
昭和十五年		二四一
昭和十六年		二四二
昭和十七年		二五四
昭和十八年		二七五

静子略歴

あとがき

.....三九

島崎静子

大正十二年

九月十日

麻布飯倉片町三十三より埼玉県川越仙波川岸小坂甚左衛門方へ〔はがき〕

御無事のよし御報知に接し何よりと存じます。小生方一同無事です——只今念のために築地浦島さんの立退先へこのことをおしらせします。

九月十日

* 御無事のよし：大正十二年九月一日関東大震災についての手紙。

* 浦島さん：私の父。浦島家は十二代続いた鍋島藩（長崎）の御典医であったが、父が西洋医学を学んだため、浦島家から父は勘当された。

九月十三日

麻布飯倉より埼玉県川越市菅原町六十九へ

甚だ粗末なカイマキですが只今鶏ちゃんに持参させますからお母さんにかけてあげて下さい。

猶御相談の模様によりお母さんに姉さんにあなたの三人ぐらゐでしたから私方（ごう）の隣家に借受けられる部屋がありますから御参考までに申上ます。そこは茶室風の静かな部屋が一つと他に一部屋

あいて居ていつまでも貸してもいいと隣家の人は言つて居ます——隣家は家族も割合に少い上に家としては小生方より広いのです。この家は小生方と裏合せの石垣の上の位置にあります。とりあへず右まで。

十三日 島崎生

加藤様

* 鶏ちゃん……島崎鶏二。藤村の二男。

九月十四日 (同前)

鶏ちゃんに托されし御手紙拝見しました。

昨夜念のためにきぬ子さんに隣家へ行つて貰ひましたら隣家の親戚の人達が避難して来ることになつて居ましてその方は駄目でしたから左様御承知置き下さい。

渋谷道玄坂上に今一軒心当りがありますからその方を聞かせて置かうと思つて居るところです。そこはあなた方全家族を容れ得るほどの部屋がある筈です。これも御参考までに。

九月十四日 島崎生

このごろは午後の七時までしか電車がありません。昨日は鶏ちゃんも新宿から歩いたそうですが、無事に帰つて参りました。

大正 12 年

* きぬ子さん：加藤きぬ子。「処女地」社の社員の一人だった人で「処女地」廃刊後も島崎家に残って、子供の勉強を見たり家事を手伝っていた人。

九月十六日 (同前)

今は平時とちがいますから婦人の外出には気をつけて下さい。もしこの次御相談等のために私方へ御出懸けの節は泊りがけにしてそのことをお宅へ断つてから出て来て下さい。

大一郎さん^{*}御帰京の上御相談の模様にて今のまゝ川越に皆さんおとどまりのやうなれば手紙にて御知らせ下さい。又東京へ移る方、御便利との御相談もあるやうなれば其節は大一郎さんに一度小生宅へ御訪ね下さるやうお話し置願ひます——中渋谷道玄坂の友人の許へは只今手紙にて頼んで置きました。

ほんのお見まひにしるしまでに粗末な反物をあつめ浦島さんまでお届けします。寒さしのぎの御用意にまで御納め下さい。右のうち一枚分はきぬ子さんよりの御見まひですから左様御含置下さい。

九月十六日 島崎生

加藤様

* 大一郎さん……私の兄。

九月二十六日 （同前）

加藤様

御手紙漸く昨日入手しました。

さういふことでしたら御上京の上兎も角も私方へお出下るやう御待申します。何角御勉強の便宜もありませうし又手伝ひ等も御願ひしたいと思います。私方には二階の四畳半が明いて居ますからそこを御貸し申すことにしませう。当分は御不自由でも我慢して下さい。寝具等は粗末なものでも御間に合せますから焼出されたまゝで御出下さい。こんな際にすこしも御遠慮はいりません。

私方一同子供等までも今回の御災難については深く同情して居ります。

昨日は全く風邪も直りましたから焼あとをたづねて両国附近まで二人の子供と共に行って参りました。下町の惨怛たる光景は実に想像以上でした。

皆々さまによろしく御伝へ下さるやう願ひます。

九月二十六日 島崎春樹

十月八日 麻布飯倉より小石川区白山御殿山百十番地栗原利子方へ

反物一反、

右はきぬ子さんより。

蒲団三枚、

右のうち敷蒲団はすこし薄いかも知れませんがきぬ子さんより貸りました。

浴衣一枚、

これはねまきの着更へにでもなすつて下さい。

座蒲団三枚、

粗末なのですがさしあたりの御役に立てば結構です。

右御届け申して置きます。委細は拝眉の節にゆづります。何角御不自由のこと、お察し申します。

十月八日 島崎生

加藤様

十月九日 麻布飯倉より埼玉県川越市菅原町六十七へ〔再調べ「新田町駅前転居」の附箋あり〕

焼けにけりされどさくらは散りすまし

とか、何角心細く御不自由がちにお暮しのこと、お察し申して居ます。御研究に心をあつめ此際

のはげましとして下さい。

お便りのある頃かと思つて居りましたところへ御手紙で辱く存じました。私の方にお預りしてある書物も小包にでも托してそちらへ御送りしませうか、近くそちらの御新居へお引移りのよしですがその上は一寸お知らせ下さい。

十月九日 藤

おかげで健康も大分回復しました。只今は午前を仕事の時ときめて毎日例の「手紙」*に筆を執つて居ます。

* 例の「手紙」…作品「子にあてる手紙」。

十二月二十日 麻布飯倉より府下巢鴨町字巢鴨一三一 一巢鴨女子寄宿舎平井しも氏方へ

いよ／＼御上京のよし昨夜は御手紙を拝見しまだ御宿所も定めかねてお出とのことさだめし落つかぬ旅人の思ひかとかげながら御案じ申して居ります。

小生も漸く暮の仕事だけはすましましたが近く木曾より年越しに上京する楠雄*を待受けることやクリスマス頃迄に出版される自著のことやらにて年末らしい日を送つて居ります。おかげで此節は健康も回復し何かしら物を書かぬ日もないくらゐです。先日は地震後長くかまはずに置いた戸棚の書籍を片付け其節いろ／＼と取出して置きましたから御宿所が定まりましたら御送りした

大正 12 年

いと思つて居ります。其内御来訪下されたく万事拝眉の節にゆづります。

* 楠雄…島崎楠雄。藤村の長男。

師走二十日

島崎 生

大正十三年

一月四日 麻布飯倉より四谷区伝馬町新一丁目二十三へ

新しい年の御祝を申上ます。

明日は四谷の方へ御見まひかたぐきぬ子さんを伺はせます。暮に小さな著述を出版しましたから明日きぬ子さんに托します。

昨三日は昨年発病の当日でしたのでいろ／＼とそのことを言ひ暮しました。

昨日は大坂の森さん^{*}、今日は辻村さん^{*}の訪問を受け御尊申上ました。

年賀のしるしまで草々

十三年一月四日 島崎生

加藤志づ子様

御預りの漱石全集其他にも御届けしたい書籍がありますが折を見てぼつ／＼御送りいたしませう。

* 森さん：森檜栄。「処女地」同人。

* 辻村さん：辻村乙未。正宗白鳥の妹。「処女地」投稿者。

二月十三日

麻布飯倉より市外池袋八二三へ

二月十三日

この頃になつて昨年の旅を思出し山辺の土産を書いて見ました。それを書きあげましたらあなたからも百瀬さんや伊吹さんからもお叱りを受けるやうなものが出来上りました。いづれ読んで見て頂く機会も近く参りませう。

春さめや蓬をのばす草の道

とか、この句を思出させるやうなあたゝかい雨が今日はこちらの町へも来て居ます。今日は裏庭の石垣の上にあつた蘭を鉢に取りまして書斎の本箱の上に置いて見て居ます。

この二三日過ぎましたらすこし暇になりますから御訪ね下さい。百瀬さんの学校での講演の筆記を漸く最近になつて手を入れましたがそれに二日もかかりました。御蔭とマツサツジ（ママ）を二週間も試みた後だいぶ私も具合がよくなりました。柳子も試験近づき毎日いそがしがつて支度して居ます。

大正 13 年

島崎生

* 百瀬さん…後に西尾実夫人。津田塾の先輩。作品「三人」の得子。

* 伊吹さん…伊吹信子。私の津田塾の先輩。

二月二十三日 (同前)(はがき)

二十五日には法事がありまして出懸けますから二十六日の午後に御出のほど御待申します。

二月二十三日

柳子のことにつきいろ／＼御手数でございました。御序に受験の日の席順番号を御知らせ下さるやう。

三月十五日 (同前)

伊吹さんから葉書が来ましたからお届けします。

先日「桜の実の熟する時」の改版が出来ました。それを小包にして御送りしましたらどういふ間違ひか附箋と共に戻つて参りました。いづれ御来訪下さる日までとつて置きませう。

さういへばしばらく御便りなきゆへこの激しい寒さにおかぜではないかと案じて居ます。昨日の午後は演技座の開場式に招かれ寒い風を冒して出懸けました。暖房の設備もない見物席に外套を着たまゝで式の太鼓の音などを聞いて居ましたが演技半ばにあまりの寒さを恐れて帰つて参りま

した。皆さんも御変りはありませんか。一寸右まで。

三月十五日 島崎 生

三月二十三日

この頃の夜は、雨の音をよくきゝます。山辺の山々も春らしくなりましたでせうか。その後はいろ／＼お仕事もお運びのよし、御元氣な朝夕をお暮しかと存じます。

一時は家のもの達にも心配をかけましたが、もはや咽喉の方は全治いたしました。どうしてか熱だけがとれませんので、まだ病床にをります。こんなに意氣地ない身を、きまり悪くなつて了ひました。いろ／＼考へさせられます。

三月廿三日 志づ子

三月二十四日 (同前)

先日は柳子^{*}のことにつきいろ／＼御心配頂き辱く御礼申します。おかげにて栗原さん^{*}よりも紹介状を頂ききぬ子さんに持つて行つて頂きました。栗原さんへは一寸小生よりも御礼状を差出して置きました。柳子の成蹟^(なりあと)は二十五日に青山の先生の方から知らせて頂ける筈です。

しばらく御伏枕の由最早それでも御快方のことゝ存じます。小生ことも兎角風邪の氣味にて御見

まひにも伺ひ得ずに居りました。この三日ばかり発熱して床に就きましたが今日は起きて居ります。雑誌改造今日にも御送りいたしますから御笑読下さい。病後の筆には力がなくて思ふやうに書けませんでした。

只今為替を同封いたしますから御受取下さい。

三月二十四日 藤 生

* 柳子：藤村の四女。

* 栗原さん：私の津田塾の同級生。娘柳子の家庭教師。

三月二十八日 (同前)(はがき)

結構なお菓子をありがとうございます。^(マ)エイチエもたしかに。おかげにてどうやら風邪も通り過ぎて行つたやうですから御心配なきやう。「三人」の御評はよく当つて居ます。一日は一日よりそれでも暮しよくなりましたからこの氣候の齎す回復の力を心あてに。

三月二十八日

四月七日

一昨日あたりからやう／＼病床をはなれました。かるい頭痛はとれずにをりますけれど。